

一九八四年からバキスタン、その後アフガニスタンでも難民らの診療を続けている福岡市出身の医師中村哲さん初の時事評論と随筆集。「人間にとって一番大切な権利は生存権」と言い切る中村さんの「魂の叫び」が並ぶ。物質文明の中で生活する日本人が読むと心洗われ「人間とは何か」を考えさせてくれる魅力的な一冊だ。

時事評論は、中村さんが本格的にアフガニスタンにかかわり始めた八九年から昨年秋まで、西日本新聞はじめ日本の新聞や、中村さんを支える非政府組織(NGO)「ペシャワール会」(福岡市)会報の発表した中から厳選した。

この間、アフガニスタンでは、軍事介入していた旧ソ連軍の撤退(八九年)、内戦(八九〜九四年)、イスラム神学生の武装集団タリバン政権登場(九四年)、米穀の空爆でタリバン政権崩壊(二〇〇一年一二月)、暫定政権発足(同)とめまぐるしい動きがあった。

しかし、中村さんと現地病院、診療所スタッフらは「幾多の戦乱と権力の変遷、現れては消える海外援助活動とは無縁に、患者や現地スタッフたちと泣き笑いを共にし、現地活動を継続してきた」。

中村さんが現地代表を務める「ペシャワール会」の事業は、医療に加え飲料水源確保、さらに農業土木工事まで広げる。すべて、現地の人々の命を守るためである。

これらの資金は、同会が募集した「アフガニのちの基金」(十億円近く集まった)と急激に増えたペシャワール会会員の会費だった。同会は、米空爆が始まると会員が急増、八千人を超えた。

本書には、二十年近く両国で医療活動など、現地の人々の立場で活動してきた中村さんの「珠玉の言葉」が並ぶ。それらは、光が当たるときだけ、にぎにぎしく動き回る大半のNGOの活動家らとは違う、大地に根ざし活動を続けてきた者だけが語り得る重たい響きを持つ。それは、湾岸戦争、米空爆などイスラム社会で「敵」を増やしている日本政府の愚行を、食い止める努力にもなっている。

巻末には二〇〇〇年七月から八月にかけて西日本新聞文化面に五〇回連載した随筆「新ガリバー旅行記」を収録している。

